

福井県文書館講演

“春嶽政権”と家臣たち —長谷部甚平と由利公正を中心に—

本川 幹男*

はじめに

1. 慶永政権の成立と展開
 - (1) 政権の成立と課題
 - (2) 安政4年(1857)、藩政改革実施と幕政改革の提言
2. 春嶽政権と殖産興業策
 - (1) 安政5年(1858)7月、慶永の隠居謹慎と茂昭の相続
 - (2) 殖産興業策の推進と東北論争
 - (3) 文久3年(1863)、挙藩上京計画中止と強硬論者の処分
3. 春嶽政権の再建と維新の動乱
 - (1) 政権の再建
 - (2) 再度の富国強兵策
 - (3) 慶応3～4年(1867～68)、新政府への参加と動揺

はじめに

ご紹介いただきました本川と申します。コロナの大変難しい時期にこうしてたくさんお集まりいただき、本当に恐縮に存じます。

本日は「“春嶽政権”と家臣たち」というテーマでお話しさせていただきます。ご承知のように、福井藩は松平春嶽を先頭に、明治維新という歴史の大転換に非常に大きな役割を果たしました。そのことを春嶽とその周囲の家臣たちとの関係を通して考えていければと思います。

ここでの春嶽の家臣として主な対象とするのは、全体としてはトップの家老、春嶽を傍らで支える側用人、そして藩が決めた政治を進める目付や各奉行などの役人たちということになります。当時は家老を執政、側用人を参政、目付を執法とも呼んでいました。

なお、春嶽の呼称ですが、藩主時代は慶永であったことはもちろんご存じだと思います。ところがかれは安政5年(1858)7月5日幕府から処分されると、名を号の春嶽と改めました(処分が弛められる前後から慶永も併用)。この春嶽と改めた頃から明治元年(1868)新政府が動き出した頃までが本日のお話と関わります。

*地域史研究者

併せて本日は長谷部甚平と由利公正という二人の家臣に注目したいと思います。長谷部甚平は辞典などでは実名の怨連であがっていることが多いですが、福井藩時代はほぼ甚平で通しますので今日はこれに従います。由利公正については皆さんもよくご存じでしょう。最初は三岡石五郎、文久2年（1862）八郎と名を替えます。由利公正は明治3年（1870）以降となります。今日はそれぞれの時期に合わせた呼び名を用います。

1. 慶永政権の成立と展開

（1）政権の成立と課題

それでは本題に入らせていただきます。こちらは先ほど申しました松平春嶽です（画像1）。慶応期（1865～68）、40歳頃の写真ですけれども、落ち着いてある意味完成された姿ですね。でも、当時、すごく悩みながら維新を迎えようとしていました。

まずは春嶽と名をかえる前の慶永の時代からみていきます。慶永は徳川御三卿の一つ田安家の八男として、文政11年（1828）に生まれました。江戸城内で幼少期を過ごし、11歳の天保九年（1838）に福井藩主の養子に迎えられ、すぐに藩主となって君臨することになります。当初は側近の家臣たちに支えられて藩主としての厳格な教育を受けます。優れた資質にプラスして將軍家との深い縁戚関係などにも恵まれ、見事な成長を遂げていきました。20歳の頃には青年君主としてすでに福井藩政をリードする立場に立っています。同時にそこから内外の危機、福井藩が抱える深刻な財政危機や、幕府が直面している対外危機にも自覚し目を向けていきます。



画像1 松平春嶽肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

（2）安政4年（1857）、藩政改革実施と幕政改革の提言

春嶽を支えた決定的な人物が橋本左内、皆さんもちろんよくご存じですね。右の画像は左内生前の頃、近くにいて学び活動していた佐々木権六（長淳）が、明治8年（1875）に描いたものです（画像2）。皆さんは島田墨仙が描いた左内の肖像画、りりしい武士像の方をよくご存じでしょうか。

さて、その左内は嘉永2年（1849）秋、大坂緒方洪庵の適塾でオランダ医学を学び始め、そこから進んで西洋の学問全体に目を向けていきます。20歳の半ば近く、ある意味当時の日本が抱える課題についてもっとも開明的な域に到達していたといわれます。それが安政4年、24歳のあたりですね。この年、福井藩は全面的な藩政改革にかかりました。



画像2 橋本左内肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

その先頭に立ったのが、当時藩校明道館の学監の一人で、実質館の運営を任されていた左内ですが、彼は人材育成だけでなく、医学・洋学や兵学などの面でも指導者として腕を振ります。ただし藩政改革に戻れば、もう一つ財政や民政面における改革も重要です。これらに直接左内が関わったことは確認できませんが、行政の統一支配を目指すもので、私はおそらくかれの影響もあったと考えています。中心人物は勘定方を統括する御奉行の一人長谷部甚平でした。かれは左内とも親しく連絡を取り合いながら改革に力を尽くします。

このような藩内を背景に藩主慶永は同4年4月25日、参勤交代で江戸へ出立しました。当時の幕府はハリスの要求する日米修好通商問題や将軍継嗣問題について大騒ぎです。江戸に着いた慶永も早速これに関わり、前水戸藩主徳川斉昭や薩摩藩主島津斉彬らとともに論陣を張ります。だが今後の幕政、ひいては日本の将来をどうすべきか、どうも見通しが立ちません。

そこで慶永は国元で改革に懸命の橋本左内を江戸に呼ぶことにしました。左内は8月に江戸へ到着、それからは慶永の片腕として国政問題に没頭することになります。間もなく驚くべき意見を展開しました。

まず幕府体制を決定的に変えるべきと論じます。国政改革ですね。これまでの独裁政治を改めて、全国のすぐれた大名や優秀な旗本などとともに役務分担し議論しあえる、現在の内閣制度のような組織づくりの提案です。明治維新より10年も早く、まだだれも考えもしなかった近代的な構想です。次に外交問題では、上下を問わず多くの人々がハリスの貿易要求に対し、「夷狄である外国人に日本を汚されるな」と叫んでいたときでしたが、それを左内は一気にひっくり返します。かれは列強のことも頭に入れた上で、むしろ日本は積極的に開国・貿易してかれらと並び、アジアへも進出すべきだと主張しました。

実は、慶永はペリー艦隊が来航したとき、全国の大名中でももっとも強硬な鎖国維持論者でした。藩全体もそうで攘夷論を叫んでいました。神国である日本は朝廷のもと、攘夷のための戦争で江戸の町が焼け野原になっても構わないといった考えです。その慶永が左内の主張で一気に開国・通商論者となって幕府に迫ります。

2. 春嶽政権と殖産興業策

(1) 安政5年(1858)7月、慶永の隠居謹慎と茂昭の相続

慶永たちはそんな風に頑張っていましたが、思うように進展しないままの安政5年4月、井伊直弼が大老に就きます。するとかれは慶永や水戸斉昭たちの主張を無視し、後継の14代将軍(家茂)を決めたり、ハリスの求める日米通商条約に調印したりと専権を振るいます。怒った慶永たちは6月25日に不時登城して井伊に撤回を求めますが厳しく拒絶され、しかも7月5日、かれらは不時登城を理由に処分されるのですね。

その日、慶永も隠居謹慎を命じられ、後継藩主として越前松平一族ながら越後糸魚川藩1万石の藩主松平直廉(茂昭)が来ることになります。かれはこのとき23歳、藩内の家臣たちがどのように受けとめたか想像がつかますね。それまでの慶永の活躍は華々しく、大老職の話もあったほどでしたから、一同地獄に落とされた思いでしょうか。誰よりショックだったのは側近の中根雪江や橋本左内です。

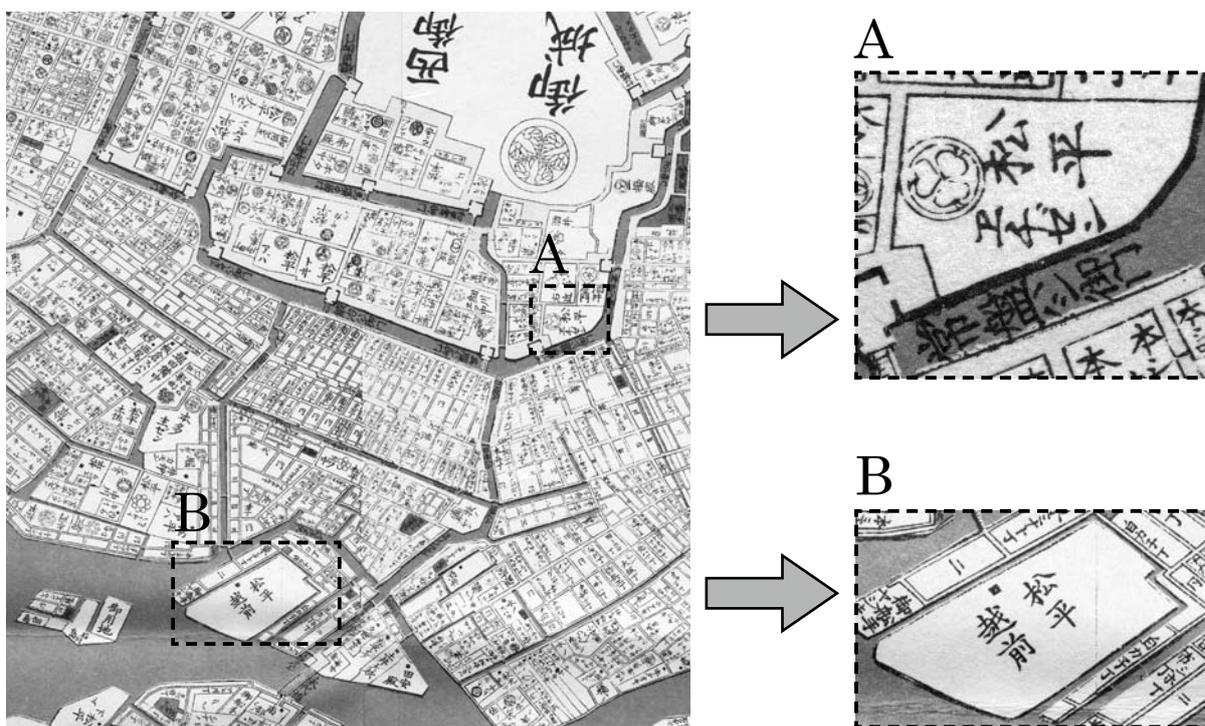
特に中根は責任を感じ切腹して詫びようとも考えたそうです。

ところで、藩内では落ち着いてくると、慶永の処分を招いたのは誰か、左内が間違っただのではないかといった声や、それまでの急激な藩政改革に対する不満から責任を問う声など、いろいろとあがってきました。これまで藩内は慶永の下に一丸となって諸改革を行ってきたはずですが、実は批判の声もかなりあったわけです。

また、新しい若い藩主に代わったけれども当然福井のことは何も知りません。だから藩内の緊張が弛み、今までよりは良いことが起こるような期待を持つ者さえ現れます。文武一致の教育・訓練や洋式鉄砲の購入などを強制されて、とりわけ生活の苦しい家臣たちは大変だったのです。繰り返しますが、藩政に対して不満・批判をもつ武士たちもかなりいたわけです。

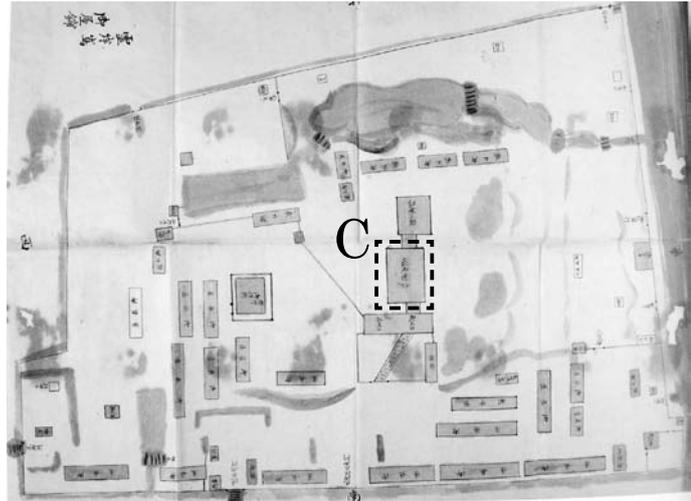
さて、その後の慶永のことです。隠居・謹慎の生活を送ることになり、最初に申しましたように名も春嶽を用いるようになりました。こちら（画像3）は安政6年の江戸図の一部です。江戸城から少し東へ下った所に「松平エチゼン」（点線部A）とあります。ここが福井藩の上屋敷、常盤橋邸です。春嶽は5年11月にここを出て、隅田川がちょうど江戸湾に出る直前、図に大きな四角に囲んで「松平越前」（点線部B）と書かれた霊岸島中屋敷に移ります。越前とはこの場合新藩主の越前守茂昭のことです。その屋敷図が次ページです（画像4）。図の作成年月日はわかりませんが、広くて2万5,000坪もありました。1万3,000坪ほどの上屋敷の2倍以上です。

図の中央に「表御建物」と書かれたところがありますが（点線部C）、謹慎はここで行われたのでしょうか。その左側には「御住所」と書かれています。奥方の勇姫はこちらの方に住んだものと思われる（二人の居住地はあくまで想像です）。慶永は、当初は部屋に籠もって毎日読書などで過ごし、部屋の掃除も自身で行いました。でも馴れてくると廊下、次に庭に出て散歩や運動をしたりする



画像3 常盤橋邸と霊岸島邸（安政6年「江戸古絵図」より）

ようになります。6年の4月初め一時体調を崩して苦しみますが10日ほどで回復し、その後は勇姫との散歩や乗馬などを楽しみ、図上部の池で小舟に乗り釣りに興じることもありました。万延元年（1860）9月に「急度慎」が免じられたものの、でも結局、文久2年（1862）4月に謹慎が解かれるまでの約4年間、屋敷外へは一步も出られませんでした。



画像4 江戸霊岸島御屋敷図（松平文庫、福井県文書館保管）

（2）殖産興業策の推進と東北論争



画像5 横井小楠肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

春嶽が処分された後の国元の藩政はどうだったでしょうか。実は処分少し前の安政5年4月、とてつもない人物、横井小楠が福井に到着していましたね（画像5）。熊本藩士で儒学者、当時もっとも進歩的な政治思想をもった人物です。

慶永はかれのことを以前に家臣の村田巳三郎（氏寿）を通して知りました。それで橋本左内を江戸に呼ぶにあたり、明道館教育を心配して熊本藩主へ頼み、藩の賓師として招いたのです。50人扶持の待遇（およそ300石取の武士格）です。来福するや接した家臣たちはすぐにかれの思想に傾倒していきました。

ところが間もなくの7月に慶永が処分を受けてしまいます。ですが藩内は混乱しつつも藩政改革など慶永路線を守ろうとし、小楠もそれに納得して福井に留まりました。やがて福井藩を大きく

飛躍させていくことになります。

その決定的な成果を先に申し上げておきます。万延元年10月、「国是三論」という福井藩のあるべき姿（藩是）をまとめた所論を家臣たちとの厳しい討論を重ねて完成させたことです。それはやがて幕府政体を変えていく力ともなります。文久2年（1862）に幕府改革を提起した「国是七条」です。こんなふうにして小楠はすごい役割を果たします。じゃあ福井藩では具体的に何をしたのでしょ。それが殖産興業と呼ばれる独自の経済産業政策でした。

殖産とは産物生産、産業を盛んにし経済全体を豊かにすることです。藩では安政5年11月、「制産方」という組織を設けました。それまでは列強との戦争を念頭に洋式の鉄砲や大砲、火薬の製造に懸命になり、その役職は「製造方」と呼ばれていました。「制産方」はそれを切り替える形で発足した組織です。「制産」という用語は橋本左内が藩の産業経済を動かすのに使い出したもので、普通は「生産」ですが、それを制御する意味を込めて「制産」としたようです。

このように「制産方」は橋本左内の思想を受け継ぐ形（反対意見もある）で新たな殖産興業策を担

い展開されます。6年8月には御奉行長谷部甚平が同勝木十蔵とともに「制産方頭取同様」の肩書を与えられました。ただし実質は長谷部が全体を統括・牽引したようです。象徴的な成果が先の「国是三論」と時を同じくしてできた産物会所です。長谷部は領民に資金を貸し与えて福井の特産物である生糸などをどんどん生産させ、それらを販売して藩・領民を豊かにしようと考えました。それらの産物を藩営の産物会所に集め、品質や直段なども確認して流通・販売させるわけです。会所は城下九十九橋北詰東側に家を構える藩の札所元締の一人荒木祐右衛門宅としました。横井小楠の指導が大きかったのですが、それを受けた長谷部が精力的に豪商たちへ働きかけ、とりわけ三国湊に出入りする北前船や、それらが持ち込む諸産物を管理する同地の湊役人（問丸）たちへの働きかけが実った形です。産物会所の設立は藩の殖産興業に決定的な意義をもつものだったのです。



画像6 由利公正肖像
（『由利公正伝』より）

ところで、殖産興業の立役者には他に三岡石五郎がいますね。後の由利公正です（画像6）。かれは安政4年段階では製造方頭取として武器製造を担っていました。殖産興業がある程度軌道に乗り出した万延元年4月頃でしょうか、新たに制産方頭取になります。取り組んだのが長崎貿易でした。

ご承知のように安政6年6月、横浜・長崎で西洋列強との自由貿易が始まります。三岡は前年12月横井小楠の熊本帰省に同行して九州視察を行い、長崎でオランダとの交易を知って目覚めたようです。小楠ともこのとき一気に親密になりました。6年5月に福井に戻りますが、同年9月には再度長崎へ向かい、同地で福井産物交易の道筋をつけたといわれます。



画像7 長谷部甚平肖像
（『濃飛両国通史』下巻より）

では次の長谷部の写真を皆さん見たことあるでしょうか（画像7）。当時長谷部は三岡の上位に立っており、私は殖産興業策でも三岡以上に貢献したと考えています。でもその後も含め、かれのことは皆さんあまりご存じないみたいですね。この写真も、後に述べますが、かれが明治に入り岐阜県令になって以降の、55、6歳頃のもので。二人を比べると共に中級家臣ながら、前述の万延元年、長谷部は知行200石で年43歳、もっとも充実していた時期です。対して三岡は100石で32歳、新設の制産方頭取でした。家格や経験において相当の差があります。長谷部は立場や経験・業績を含めはるかに三岡を上まわっていたわけです。2年ほど後には立場上は両者ほとんど並ぶのですが……。

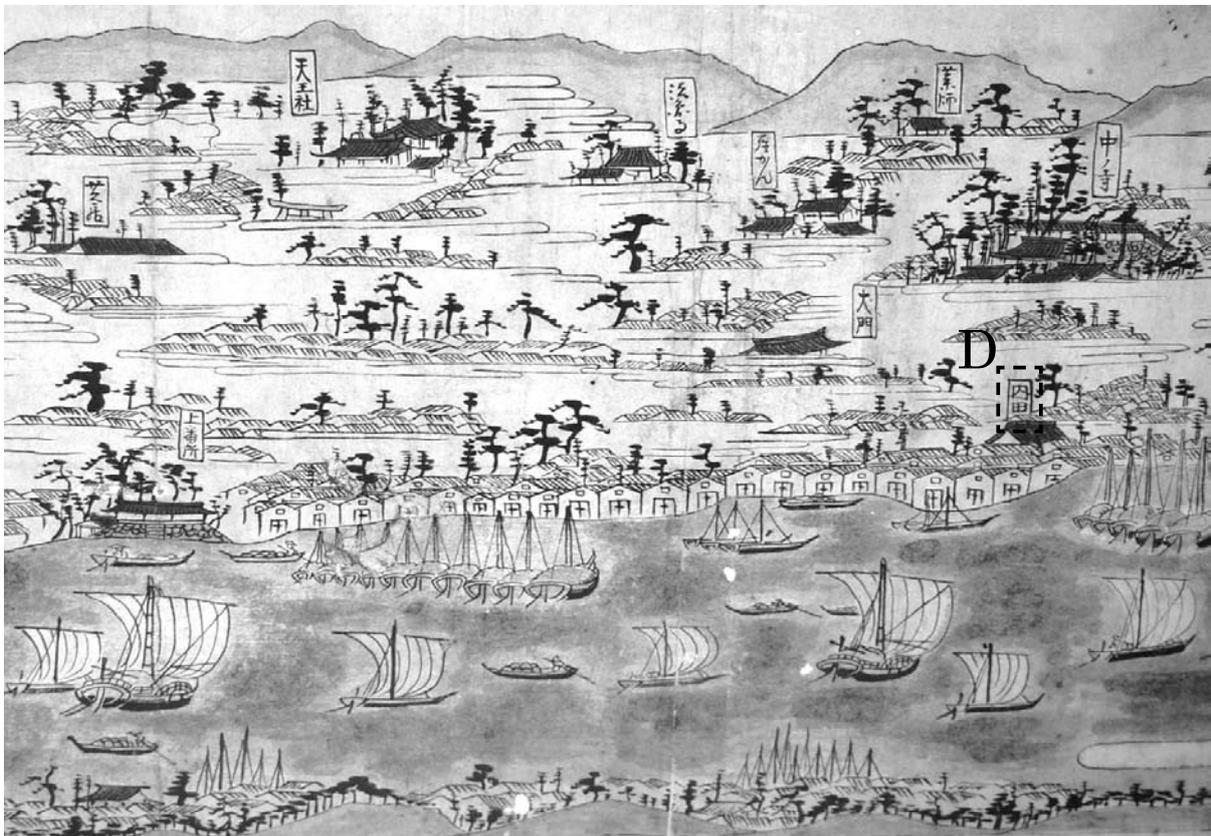
長谷部について中根雪江も言っています。「長谷部は学識あって剛明可決」と。実際学問知識に優れ、性格は剛胆で行動力に富むと評価も高かったようです。町人たちからも好評でした。長谷部は万延元年には福井町の町奉行も兼ねていましたが、城下一番の豪商であった米問屋の山口小左衛門は翌文久元年（1861）、家の記録（『山口家譜』、『福井市史資料編7近世五』）に、「国内一統人気が高く、前代未聞の御奉行」と手放しの褒めようです。長谷部は藩財政はも

もちろん、町人・百姓たちの生活面にも目を配っており、そのようなことから評判が良かったのでしよう。

長谷部のことをもう少し見ておきましょう。下の図はみくに龍翔館が所蔵する慶応元年（1865）の三国湊を描いた景観の一部です（画像8）。日本海を上下する北前船が沢山湊に出入りしている様子が描かれており、各地物資の流通が盛んであったことが窺えます。図の中央右側（点線部D）に「内田」と見えますが、当湊きっての廻船業を営む内田惣右衛門家です。先ほど触れましたように、長谷部はこの豪商内田氏や湊の産物流通を管理する問丸たちに対し、万延元年4月、三国町のためだといって出入りの産物などに藩が課す口銭（税の一種）引き下げの提案をしました。特に米や塩、それに日用品など、人々の生活に直結する品物の値を安くして産物の流通量を増やし、それで町が豊かになると説いたのです。だが当時湊の口銭は年間2,000両ほど、財政難の藩にとっては大切な収入の一つのはず、それに問丸たちはその一部を分与されていましたから減らされるかと気にしたでしょう。長谷部の意図が理解できず容易に話に乗りませんでした。

しかし、長谷部は諦めません。恐らくは横井小楠のいう「民を豊かにし国を豊かにする」という民富論をふまえ、口銭の引き下げは「湊の繁盛」のためであり、「国中融通」のためだと説得したと思われる。問屋たちは納得し、こうして三国湊の産物出入りが増え、三国町は隆盛期を迎えることとなります。

いっぽう、三岡の方ですが、先に触れましたように長崎交易に懸命でした。次ページの図は慶応2



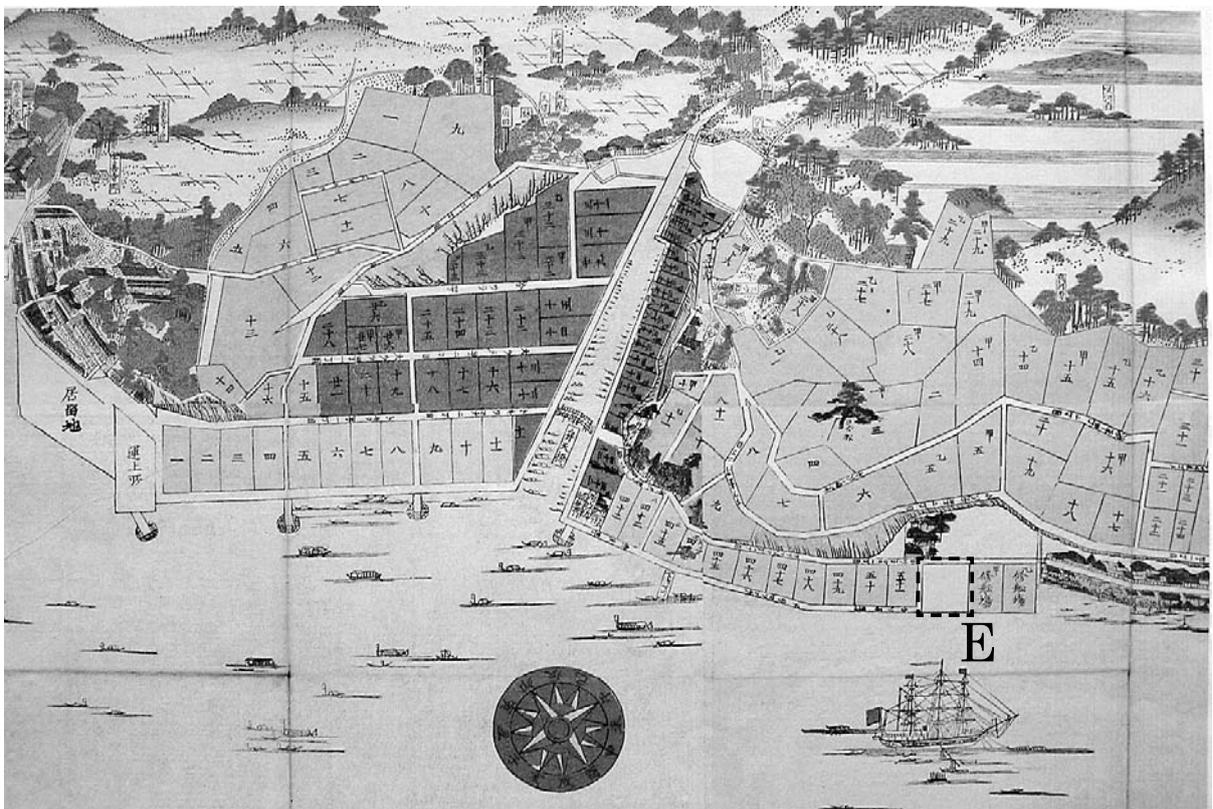
画像8 慶応元年「越前三国湊風景之図」（みくに龍翔館蔵）

年当時の長崎港の入口近くを示しています（画像9）。上部左端に唐人屋敷が見え、出島、そして長崎の町は更にその左に続きます。ここで三岡はオランダ商館へ福井藩との交易を持ちかけました。後年にかれの口述をまとめた伝記（『由利公正伝』『子爵由利公正伝』）によれば、安政6年（1859）の時点ですでに莫大な利益をあげたそうです。ただし実際のところそれを証明する史（資）料はほとんど確認されていません。

図をよく見ておきましょう。港から背後の丘に向かう一帯が細かく区画され番号がふってあります。これは自由貿易で増える外国人来航者の居留地を造成するためでした。工事請負人の一人に長崎きつての豪商小曾根乾堂がおりました。かれは幕府の方針を知ると、素早く土地を確保して造成にかかり、売り込みをはかります。万延元年頃には開始しており、その一角（右下帆船付近の点線部Eの上）に自身の大きな屋敷も設けました。三岡は同家に接した無番号地に藩の産物保管蔵を確保したらしいです。かれは小曾根を頼ってオランダ商館と話をつけ、交易の道筋を付けたのでした。

というのも安政期早く、藩主慶永が小曾根を知り、おかげで橋本左内もかれと西洋書物などのことで接触しており、当時江戸に来ていた三岡も左内の用件で小曾根を訪ねたことがあって顔見知りだったからです。小曾根は三岡の来崎目的を知り、福井藩から居留地造成の資金借用をもちかけ、藩は安政6年中に5,000両貸与しています（『御用日記』（松平文庫））。

けれども小曾根が取り組んだ造成事業は、長崎奉行が幕府直轄の居留地に改めたりして、思うようにはいきませんでした。藩と小曾根は貸した金子の返済でもめまします。小曾根との関係がまずくなり、文久元年（1861）、藩は長崎町の一角に福井屋を設けて交易を進めました。貸付金の方は長崎奉行が

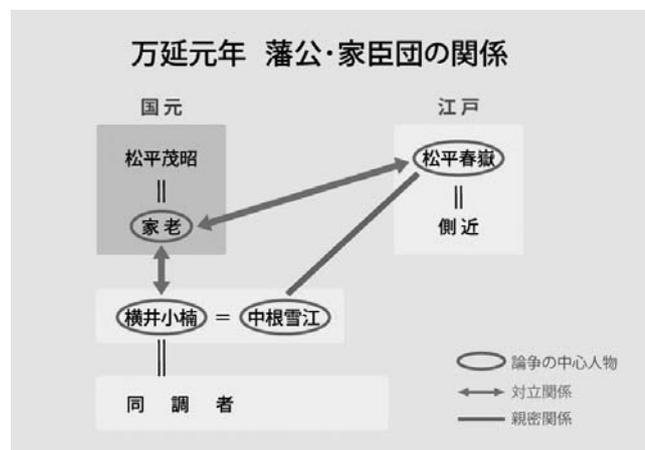


画像9 慶応2年「長崎居留場全圖」（早稲田大学図書館蔵）

中に入って返済されることになり、一部は戻りましたが多くはそのままに維新を迎えてしまいます。そんなわけで三岡が進めた長崎交易については、後にかれ自身大成功だったと誇っていますが、オランダ商館との交易実施は事実ながら、実状ははっきりしないのです。

このような経過を辿りながらですが、長谷部や三岡が頑張って殖産興業策は諸産物の生産、流通、販売に至るまでかなり見通しが立つことになるんですけど、実は藩内にはもう一つ政治上の重大な問題が起こっていました。やはり万延元年の東北論争です。東は江戸の春嶽、北とは北国、国元の福井のことで、両者の人事や殖産興業など藩政のあり方をめぐる論争です。

ことは謹慎生活に慣れてきた春嶽が人事に意見を漏らし始め、国元の家老たち（文久3年に挙藩上京問題で処分を受けることになる、本多飛騨や松平主馬など）が反発したのです。かれらは国元で若い藩主茂昭を支え、小楠の指導を得て懸命に働いているのに、謹慎中のはずの春嶽から人事で反対され我慢できなかったのです。それも春嶽のもっとも信頼する中根雪江、春嶽が処分を受けた後やがて福井に帰り、静かに隠居のように生活を送っていた中根が、密かに家老たちの人事を伝えるなど連絡し合っているとの噂が流れ、険悪になったようです。しかも双方共わかりあっていると信じていた横井小楠が裏で中根と通じているとの話や、それぞれに加担する家臣もあって、藩内上層部が激しく紛糾し、殖産興業策についても激論となったのです。おおまかにまとめると図のような対立構造ですが（画像10）、家老共は直接春嶽に反論できず、むしろ小楠との対立が強まりました。



画像10 東北論争関係図

頂点に達したのは万延元年10月15日のことです。最初小楠は今日決着できないなら槍一本提げて熊本へ帰ると息巻き、家老たちは小楠が納得しないのなら熊本へ返すといった剣幕です。それこそ「大議論」を必死に詰め交わしたところ、しだいに各々の私欲などが自覚され、ついには大逆転、疑念は一挙に氷解し一同「開悟」「大笑」となりました。顛末はよくわかりませんが、小楠独特の討論による導きが見事に結実し、家老以下は「落涙」にむせんだそうです。劇的な展開だったことが想像できます¹⁾。直後、家老たちは春嶽様へ申訳なかったと、松平主馬が目付を連れて江戸へ走り、事態を説明し詫びました。それで春嶽も感動し同じく詫びます。見事両者は和解し、今後はともに藩のため国家のため力を尽くすことになりました。

10月15日を境に状況一変、一同「新政」に走り出します。議論してきた「国是三論」が出来上がり、国を豊かにする「富国」、外国から国を守る「強兵」、武士のあるべき姿を求めた「士道」を柱とする福井藩の目指すべき理念・目標が確定しました²⁾。また産物会所の設立も了承され、領内豪商・豪農たちの協力を求めて三岡たち制産方が各地へ飛びます。ここに殖産興業策が本格的に動き出したとってよいでしょう。そして何より、春嶽はいまだ謹慎中ですが、かれの下で一致協力することが確

認され、ここに改めて春嶽政権とも呼ぶべき状況が出現したといえます。

(3) 文久3年(1863)、挙藩上京計画中止と強硬論者の処分

その後の文久2年4月25日、春嶽の処分は完全に御免となりました。そればかりか時勢の進展により同年7月9日政事総裁職に任じられ、幕政のトップに立って活躍することになりますね。そして翌年1月には将軍家茂の上京に従って京都へ赴き、公武合体を確かにして天皇・朝廷と協力し、開国問題など日本が直面する課題を解決しようとしします。でも京では尊王攘夷運動が相変わらず強くて見通しが立ちません。落胆した慶永は3月21日に勝手に京を発って福井へ帰り、横井小楠たちと相談しました。

すると今は日本中本気で国家のあり方を考えるべきときであり、そのため京に「公議會」を設け、公武関係者や諸大名・有志すべてが参加して議論すべきとの意見でまとまります³⁾。外国人も参加させるとの開かれた議会です。春嶽は同意しました。5月、万一に備え藩兵4,000人を擁して上京し、その実現を図ることを家臣団に告げます。ある意味クーデターに近いですね。

ところがその意気込みはすぐにしほみ出します。残念ながら京都に滞在中の将軍が江戸へ帰ってしまったのです。これでは何より公武合体の見通しが立ちません。藩内では挙藩上京中止が叫ばれ始め、春嶽もその方向に傾いていきました。強硬派の家老や長谷部・三岡たちを押さえ始め、ついに7月23日、かれらの処分に踏み切るのです。その日「思召」だとして家老本多飛驒と松平主馬の職を解いて謹慎を命じ、それを皮切りに次々と同調者に処分を下していきました。もっとも、家老たちの謹慎だけは1週間ほどで解かれます。他の多くも似た扱いでした。

しかし長谷部と三岡だけは違いました。長谷部も7月23日に「思召」で「御役御免」となり「遠慮」の扱いでした。それが8月3日、再処分となります。「勤役中近来別して我意ニ募り」勝手な計らいなど「品々御政道ニ相触候」などとの理由をつけて「蟄居」を命じ、家督も伯父に相続させるのです⁴⁾。三岡の場合はその頃九州熊本藩や薩摩藩へ派遣されていたため、処分は帰国翌日の同月29日でした。理由や処罰内容は長谷部とほぼ同様です⁵⁾。ただ春嶽は三岡の方がより罪が重いと見ていたようです。とにかく二人はこうして藩政から完全に追放されます。この事態に横井小楠も失望し熊本に帰るしかありませんでした。

3. 春嶽政権の再建と維新の動乱

(1) 政権の再建

藩内は混乱し、春嶽も今後の藩運営に悩んだことでしょう。ところで、京では8月18日の政変が起こり、急進的な攘夷派が京から一掃されて一気に公武合体の気運が高まります。春嶽へ上京を促す知らせが届きました。

でも藩のことが心配です。小楠は去り、かれの同調者は処分しましたが、藩内に浸透した小楠の影響が色濃く残っていたからです。上京するとなると事情は挙藩上京を計画したときと同じだし、京の事情を知る長谷部・三岡たちの罪を許し、同行させるべきとの声さえ出ていました。

もちろん春嶽は処分の撤回を認めません。悩んだと思いますが10月13日に京へ向かいました。で

も上京してみるとどうも期待はずれです。翌元治元年（1864）正月に「参与」、2月には「京都守護職」に任じられますが、名前のみで参与会議は進展せず、何より幕府・一橋慶喜などの改革意欲が見えません。またも意気消沈して4月23日、福井に帰るのです。

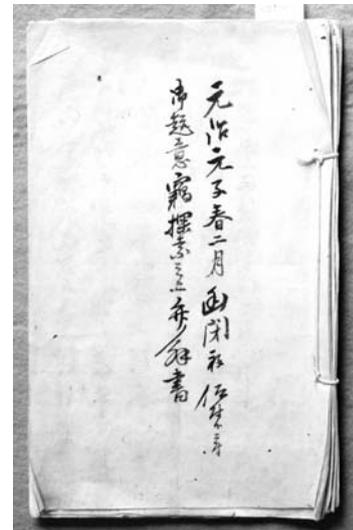
ところでその前、参勤のため江戸にいた藩主茂昭は、幕府の指示で上京し、京の警固などに就いていました。一応の役割を終え帰国することになった2月5日、春嶽は茂昭を招き今後について話し合います。

一つは二人の役割分担です。春嶽は中央で徳川家・朝廷のために働く。「我が越国は徳川家第一の親藩」であり、その立場に立って日本を外国に畏敬される「大信義大強国」になるよう尽くし、いっぽう、茂昭はそんな春嶽を支えられるよう国元の藩政に責任をもつといった内容です。このとき二人は分担のことも含めて今後の目標を六か条にまとめました。

もう一つは横井小楠の影響についてです。春嶽は、以前に小楠が領民のため家臣のためにならない愚かな君主なら養子を迎えて国が治まるようにするのが「君職」の役割だと言っていたことを挙げ、それは君臣の名分を誤る危険な考え方だと茂昭に注意を促しました。春嶽は「国是三論」など、かれの卓越した思想を評価しつつも、全面的に心服するのは君臣間の基本である名分論の立場からも危険だと改めて考えたようです⁶⁾。そのことが世に広まったり、また藩政に小楠の影響が残らないか心配だったんですね。

これらのことを確認して2月13日に福井に帰った茂昭は、翌14日に重大な処分を発表しました。元家老の本多飛驒・松平主馬、現家老岡部豊後、大番頭牧野主殿介、目付千本藤左衛門の五人に対するものです。岡部だけ前年処分されませんでした。残る四人は再処分、しかも今度は前回よりはるかに厳しい内容です。特に本多と松平の二人が蟄居と重く、「在職中臣子の名分を忘却致し、容易ならざる儀共妄議」を行ったと決めつけています⁷⁾。臣下の名分、家臣としてもっとも大切な本分を忘れ、かつ「容易ならざる儀」すなわち反逆ともいえる企て「妄議」があったというのです。予期しない事態で一同さぞ驚いたことでしょう。

この処分についても史料が残っておらず、なぜそんな罪名がついたのかもこれまでわからないままでした。幸い近年、みくに龍翔館で本多重方家文書が公開され、飛驒の書いた「弁解書」が確認されました（画像11）。



画像11 「本多飛驒弁解書」
（本多重方家文書、みくに龍翔館蔵）

本多飛驒は処分申渡しの後、その理由を知りたいと知人に調べてもらったそうです。すると文久3年7月、飛驒は挙藩上京計画の中止を知って落胆し、藩主茂昭と春嶽の両君の引退を図り、その話が老中の一人である丸岡藩主有馬道純にまでも届いていたらしいとの話が入ります。飛驒は驚きました。だれかの「讒言」であり、「冤罪」だと怒ります。確かにあのと時言葉が強過ぎたことがあったかも知れないが、それは春嶽や幕府・国家のことを思っていることであり、それに前の処分のときはそれが問題にされたことは一切なかった、と不服でいっぱいです。けれども藩主の処分決定には逆らえませ

ん。「一点（も）君臣名分ヲ忘却」したことはなかった、とせめて子孫に伝え、いつか冤罪が雪がれることを願って「弁解書」を残したのです⁸⁾。

もっとも、これだけでは確かなことは言えませんね。ただ春嶽はある意味飛驒たちを見せしめにして藩内の動揺を抑えまとめようとしたのかも知れません。何故なら当時の春嶽は、中央で幕府のため、ひいては朝廷、日本国家のためだと大義名分をかかげて諸問題で「正論」を力説していたからです。受け入れられないのは藩内に名分に違う家臣を放置していると疑われているかも、と心配したように見えます。

処分を終えた翌2月15日、茂昭は春嶽と京で決めた6か条の「直書」を家臣に「諭告」し、「節儉」と文武に邁進し「士道」を実践するよう促しました。もっともそれで春嶽が幕閣から見直されたりすることはありませんでした。当時外国側が要求していた大坂開港なども進展することは見込めません。結局、春嶽は失望して福井に帰るしかなかったのです。

付け加えておきます。本多飛驒や松平主馬の罪が解かれるのは慶応元年（1865）でした。前年8月に隠居謹慎となったままの長谷部甚平や三岡八郎が許されたのは一年遅れて同2年6月です。

（2）再度の富国強兵策

福井の春嶽は今や中央ではだれも頼れず、しばらく自藩の建て直し、足下を固め富国強兵に専念するしかないと考えたと思います。そのために取り組んだのが薩摩藩との交易でした。当時一定の信頼関係にあった薩摩藩島津久光にもちかけ、慶応2年3月、交易協定を結ぶのです。

薩摩藩はこの頃すでに倒幕の方向にかじを切っており、同藩と福井藩との提携が一般に知られば、幕府や朝廷ばかりか親しい有志大名なども、これまで公武合体を唱えてきた春嶽を信用しなくなるかも知れません。ですからことは秘密裏に進められたはずで。一方で薩摩藩は福井藩に期待したと思います。両者の思惑が重なって福井藩は薩摩藩から17万両の大金を受け取りました。代わりに領内はもとより越前一带、それに美濃や北陸各地から産物を集めて薩摩に送る約束です。薩摩側は福井から送られた諸産物をオランダなどへ売却し、より大きな利益をあげる算段だったでしょう。

慶永はこのようにして富国を進め軍事強化も図ろうとしたのですが、しかし、それには小楠時代の産物会所の体制を整え直すしかないとわかってきます。でもそれにはこの方面に経験がある、横井小楠に同調して処分した連中を許し、復職させることが必要です。福井藩はある意味また小楠時代に戻ることになるわけです。先ほどの家老たちや長谷部・三岡たちを除き、実務に堪能な制産方及び産物会所関係の家臣たちを復活させ要職につけました。

（3）慶応3～4年（1867～68）、新政府への参加と動揺

慶応3年10月大政奉還、12月王政復古へと歴史は大展開しますね。その王政復古にあたり、福井藩は薩摩や安芸・尾張・土佐の4藩と共に新政府樹立に参加し、重要ポストを占めます。福井藩からは春嶽が議定、家臣の中根雪江・酒井十之丞・毛受鹿之介、そして三岡八郎が参与として加わりました。三岡も入るんですね。もちろん、春嶽がかれを推薦したわけではありません。ご存じのようにあの有名な坂本龍馬が引っ張り出したわけです。龍馬の死後かれの遺志を継いだ岩倉具視の力も大きかった

らしいです。

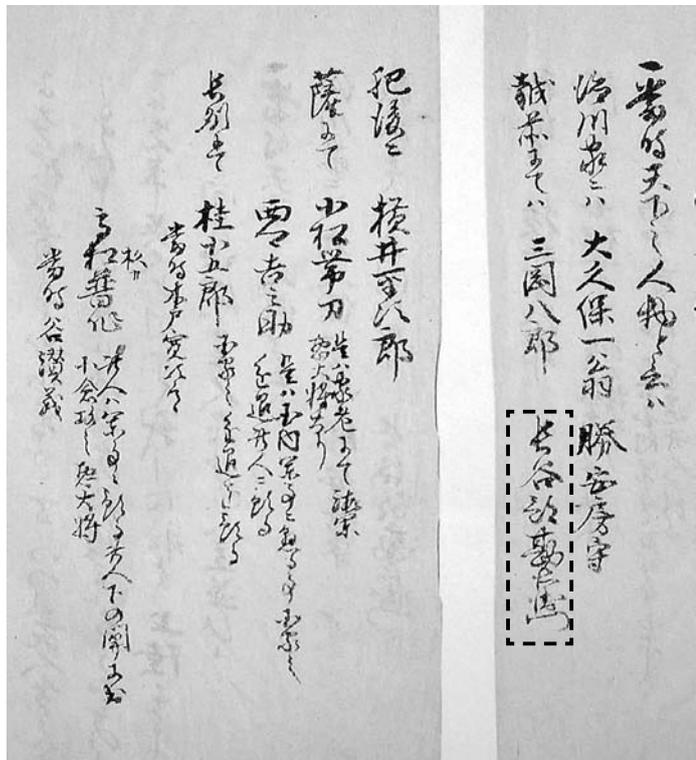
初め春嶽は三岡の登用には大反対だったのですが、押し切られ諦めたようです。このことでは2014年に発見された龍馬の「越行の記」が大きな反響を呼びましたね。それには新政府で「惣して金銀物産とふの事を論し」られるのは三岡しかいないと書かれていたからです⁹⁾。

ただし、なぜこれほどに龍馬が三岡を評価したのかということになると、どうもはっきりしません。將軍慶喜が大政奉還した後の10月28日、龍馬が福井の三岡を訪ねてきて、2日後の30日、二人は4年ぶりに再会し面談しました。そのとき三岡が、「わしは藩財政でこんなことを行った」と相当な手柄話を吹聴します。そんな話は文久3年5月、二人が福井で初対面した時もあったようですが、聞いた龍馬はその話を全部本当だと思いこんだようです。それが三岡を新政府の財政担当に迎えるもとなつたみたいです。

しかし、そう、今までの話しからいえば、福井には財政ではもう一人長谷部甚平がいました。1年前の慶応2年、龍馬が国元の家へ出した手紙があります(画像12)。それには「当時天下之人物」として、徳川家では大久保一翁(忠寛)と勝安房守(海舟)、越前は三岡八郎と長谷部勘右衛門、他に肥後の横井平次郎(小楠)や薩摩の小松帯刀・西郷吉之助(隆盛)、長州の桂小五郎(木戸孝允)・高松普作の名が挙がっています¹⁰⁾。

先に申し上げれば、龍馬は長谷部のことも三岡と並ぶ重要人物と知っていたこととなります。ただ直接会ったことがなかったためか、名を「勘右衛門」と誤っています。でも直接会って

敬服している横井小楠の名も平四郎を「平次郎」と間違えています。高松普作には杉の字を松と書いた横に「杉か」と付記があります。普作は「普作」です。他にもありますが、だから長谷部の名を書き間違っても不思議ではありません。そして、ここに見える長谷部以外の8人は龍馬自身よく知り、いずれも維新変革に多大の役割を果たした「天下」の人物たちです。とすると長谷部についてもこのときは同じ扱いだったと考えられます。それが彼だけは抜け落ちるのですね。とにかく龍馬は三岡に惚れ込み、かれの話だけを信じて、新政府への登用となつたわけです。もっとも、この手紙は写しです。龍馬自身が実際にこの通りに書いたのかどうかはわかりません。でも現在確認されているたくさん龍馬の手紙には、かなりの誤字や当て字が見られます。それに彼は物事にあまり頓着する人柄ではなかったといわれます。したがってここでの誤字や間違いもあまり気にしなくてよいかも知れ



画像12 慶応2年12月4日付坂本龍馬書簡写 坂本権平一同宛(部分)(個人蔵、高知県立坂本龍馬記念館寄託)

ません。そう考えると何故ここに長谷部の名があったのか、この点、幕末の福井藩を正しく理解する上からも検討してみる必要があるのではないのでしょうか。

長谷部は三岡だけが新政府へ呼ばれてあせったそうです。でも春嶽は三岡の登用にも反対でしたから頼れず、手をこまねくしかなかったでしょう。幸い慶応4年（1868）5月、推挙の経過は不明ですが、かれは美濃笠松県の知事に取り立てられました。福井藩時代の殖産興業の経験を生かし、明治4年（1871）の廃藩置県後は更に岐阜県令として活躍します。残念ながら翌年11月に病死し、家族も福井に戻ることはありませんでした。

さて、新政府ができあがり、次第に体制を整えていきます。慶応4年3月14日、三岡の手書に始まった「五箇条の御誓文」が発布され、近代的な国家を目指す方針が掲げられました。

福井藩ではこれまで春嶽が主張してきた公議政体のことだと受けとめたのではないのでしょうか。評定局という藩政組織を設けるべく、その構成人事案としてトップを藩の別格家老本多興之輔（副元）とし、家老松平主馬（間もなく備後と改名）以下役職に合わせた有力家臣の名が次々挙げられました。

これが藩主茂昭から京都の春嶽に届くと、間もなく返事が返されてきます¹¹⁾。まず府中本多はまだ若くて経験がないからトップは無理、松平主馬は元々無能で不適格、などといった手厳しい意見です。となると実のところ中級家臣の村田巳三郎や千本弥三郎など、藩政に経験のある、かつ横井小楠の影響を強く受けていた人物たちが藩の実権を握ることになるというのです。村田や千本は長谷部甚平や三岡八郎に近く、かれらの意見を聞くことになり、折角新しく開かれた藩体制に改めようとして、実は長谷部・三岡政権ができたのと同じになると心配するわけです。春嶽には長谷部・三岡、その背後にあった小楠の大きな影が残り続けていたようです。

ところでこの時期、戊辰戦争が勃発し、反政府の会津藩を中心に東北一帯が戦乱に巻き込まれますね。日本海側では越後長岡で大規模な戦争が起こり、これに福井藩も出兵を命じられました。しかし春嶽は、ハリスとの日米通商交渉以来、一貫して国内に内乱が起こらないよう主張してきました。ですから今度もこの戦争には反対です。ただし新政府は強硬で、命に従わず反逆のつもりかと迫ってきました。春嶽はここはやむなしと諦めるしかなかったようです。すると先ほどの府中本多など、藩内から一部激しい反発が起こりました。福井藩は親藩として徳川家に尽くすべきと思ってきたのに、その徳川家を潰す戦争に参加するのは間違いだと強硬です。最終的には福井藩は出兵を決め、本多は病気の藩主茂昭の名代となって出陣するのですが、春嶽と府中本多の関係は相当に厳しかったことが窺えます¹²⁾。明治3年（1870）に本多家中や府中領民が一体となって起こした武生騒動も、あるいはこれが伏線になったのでしょうか。

話を戻しますが、新政府は福井藩内の状況を知ってか、なかなか出兵しないため春嶽に対する不信感を強めました。側近の中根雪江は必死に弁解しますが、状況は変わりません。気落ちしたのか、かれは出兵直後の8月、福井に帰り二度と政治の表舞台に出なくなりました¹³⁾。

春嶽もまた政府のあり方、また福井藩の事態に失望し、明治3年7月、新政府への辞意を決意します。理由に次の「三不堪」をあげました（『越前松平家家譜 慶永4』）。

- ①朝廷に対し恐懼きょうくに堪えず、
- ②衆人しゅうじんに対し愧赧きたんに堪えず、

③国情を疑われ憂^{ゆうざん}暫に堪えず、

①は、朝廷の指示に応じられず、誠に恐れ多いということ、②は、新政府を代表する一人でありながら、戊辰戦争を招いてしまい恥じ入るばかりだ、③については、福井藩内では様々な話が飛び交い、政府から全く信用されていないことを憂える、といったことです。引退は認められなかったのですが、この深い歎きをみると、少なくとも福井藩における春嶽政権、春嶽の時代はここで終わったことになりそうですね。

春嶽以下家中共どもこのような中で福井藩は明治維新を迎え、廃藩に至ります。私はこのような展開を何かここで悪く評価しようとしているわけではありません。幕末の福井藩は実に大きな役割を果たしましたが、内部でこういう様々な苦悩を抱えつつ、維新へと向かったのだということをお伝えしたかったのです。春嶽は春嶽の、家臣たちには家臣たちのそれぞれの主張や動きがあり、そういう中でやがて近代福井が生まれて来たんだと考えております。解明すべき問題はまだまだありますが、本日はこれで話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

〔付記〕本稿は2020年（令和2）9月13日に、福井県立図書館多目的ホールで行われた講演会「“春嶽政権”と家臣たち－長谷部甚平と由利公正を中心に－」の講演録を加除・修正したものです。

なお、次の注1）～13）は、講演の各指示の箇所に関係する主要な史料として、出席者に配布したものです。

注

- 1) 万延元年10月17日 中根雪江言上書（中根雪江筆「秘書」、春嶽公記念文庫、福井市立郷土歴史博物館蔵）
……（横井小楠）此度之一議ハ国家興廢之境候へハ、時宜ニよつてハ槍一本引提、即座にも罷帰候覚悟ニ而有之、又御家老共も今度ハ小楠でも先生でもどこ迄も合点行く処まで押詰、自然詰らぬ事候へハ、たとひ訣別相成候而も引留ハ致さぬ決心なりしと、互ニ一六勝夫にてかゝり候次第迄も打出したる物語にて大笑と相成、転禍為福之次第とハ相成候得共、実ハ甚以危殆至極之事ニ而、……
（中根雪江）執政聚是迄君臣之大義を心得違被致候故、種々之事共致済来候得共一段發明有之、君に対し臣たる道を尽さんと志を決せられ候上ハ、上にも亦君道を御尽し不被下候而ハ不相済候、是迄ハ臣ハ君を責め、君は臣を責め、君臣互ニ相責め、原頭を誤りしより自ら違乱も生候得共、臣已ニ臣道を尽す上ハ君亦君道を被為尽、執政衆近年之勤勞も寔に不容易候次第を深く御体察被為在候様仕度儀と申候、又是迄ハ当公も執政衆と君公との御際に御立被遊、如何斗り御心勞御迷惑被遊候御事ならん、此度執政衆如此開悟有之、……
- 2) 文久元年1月4日 荻角兵衛・元田伝之丞宛横井小楠書簡（『横井小楠遺稿』、山崎正董編、日新書院、1942年）
……扱又国是三論出来、一は富国、一は強兵、一は士道、此三論を以て一国を経綸する土台に立、……扱又町・在へは至窮民救恤は勿論、第一大問屋と云役所を建、何品によらず民間職業之物をかひ上る、其役人は官府にては町奉行・勘定奉行・製産方当時専三岡主として取斗ふ、……此問屋一条にて上下一致に相成、初て上之仁心下に通じ、下の良心上に通じ、是迄聚斂など之旧習も一時に消融致し、只々上よりは下之富を楽み、下の貧を憂る元来之心と相成候て、下又是迄疑惑不信之心解候て、上を信ずる本心と相成候、元より此一事にて政事相済む事にて勿論無之、是より郡政を初家中之仕置・強兵之手段など漸々相立候事に有之候、……
- 3) 文久3年5月26日 在熊社中宛横井小楠書簡（『横井小楠遺稿』、山崎正董編、日新書院、1942年）
（挙藩上京を）一藩中一人も異儀申者無之、何も御尤々と競立、何も必死の心底相顕心地能き事に御座候、就中御家老にて本多飛驒・松平主馬・狛山城など感激尽力無残処、其外御役人にては長谷部甚平・三岡石五郎・村田巳三郎など、御番頭御用人にて誰某、誠に尽力感心仕候、
- 4) 文久3年8月3日 長谷部甚平への処分申渡し（『福井藩士履歴』5、福井県文書館資料叢書、2017年）
勤役中近来別而我意ニ慕り、自己之取斗なども有之、品々御政道ニ相触候儀共追々達御聴不届ニ付蟄居被仰付、伯父協江家督相続被仰付、式百石被下置、大御番組江被入、遠慮被仰付候、兩人共急度相慎罷在候様被仰付、協

- 義他国御用留守中ニ付罷帰候上可申渡旨、長谷部作内江被仰付候、
- 5) 文久3年8月29日 三岡八郎への処分申渡し(『福井藩士履歴』6、福井県文書館資料叢書、2018年)
 近来我意ニ募り、専ら自己之取斗より既ニ人心を害ひ、其上品々御政道ニ相触候儀共達御聴不届ニ付蟄居被仰付、
 弟友蔵へ家督相続被仰付、知行百石被下置、大御番組江被入、遠慮被仰付候、兩人共急度相慎可罷在、友蔵義他
 国御用留守中ニ付、一家共之内へ申渡取扱候様、
- 6) 元治元年2月4日 松平春嶽、横井小楠の君臣論を批判
 (『続再夢紀事二』、日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1974年)
 第一君君たらずとも臣臣たるの道を尽すと云へり、然るを(小楠は)(君が)不才庸劣なれハとて是を閉蟄せし
 めて他より養子をして其主を新たにし、国家を治むるか君職也、治むること不能れば、君といへとも君ならず、
 臣在ての君なり、左すれハ社稷国家ニハ難換候故、君といへとも国家を保つ事肝要也といふ儀ハ毎ニ入耳聴候義、
 便(小楠説は)君臣の紀綱紊乱之端緒を開けり、夫よりして其説に乘し不可言説紛々蜂起し、終ニハ此説よりし
 て朝廷・幕府之上にも致関係、軽蔑朝廷侮慢幕府之説頻ニ起り……
- 7) 文久4年2月14日 本多飛驒へ処分申渡し(『福井藩士履歴』5、福井県文書館資料叢書、2017年)
 在職中臣子之名分を致忘却、不容易儀共及妄議候段、重々不届至極ニ付急度も可被仰付処、皇国之御為与存込候
 次第も有之ニ付、格別之御有怨を以御加増知式百石御取揚、蟄居被仰付、
- 8) 元治元年春 本多飛驒「弁解書」(本多重方家文書、みくに龍翔館蔵)
 (探索の上、飛驒)自註ニ云、扱々案外千万驚愕ニ不堪候、無勿体も数代御厚恩ヲ蒙り居候大身之家柄、況ヤ近
 来格別之知遇ヲ戴キ、日夜粉骨碎身、乍不及国務ヲ致勉勵候身分、夢々左様之事無之はず者勿論聞も汚ら敷次第
 也、何など之為ニ両君を可廢哉、三歳之童子も可知事、仮令寸毫ニ而も左様之事相工ミ候逆何之詮も無之儀、国
 家ヲ誤り悪名ヲ千歳ニ顯シ、家ヲ亡シ身ヲ失ひ、利害ヨリ見テモ何一ツ微益之事無之、況ヤ道義之一端も心得居
 候者、毛頭左様之事者無之はず、……唯々国家之御大事ヲ存込一身ヲ抛チ致精勵候事、君を思之余り多難迫切
 之御時態故、自然言語之激切ニ過キ候弊ハ可有之哉ニ候得共、一点 君臣之名分ヲ致忘却候事二者無之、君ヲ
 シテ世界中之 明君ニ仰キ、国家ヲシテ信義ヲ天下ニ立ント而已思込候事、取も不直臣子之名分ヲ明らかニする
 到トコソ存候事、
- 9) 慶応3年10月30日 坂本龍馬「越行の記」
 (『幕末維新の激動と福井』、福井県立歴史博物館特別展図録、2018年)
 朝(龍馬宿へ)三岡八郎及松平原太郎来ル、……^(三岡八郎)三八日ケ、將軍家信ニ反正すれば何そ早く形を以て天下に示
 さゝる、近年來幕府失策のミ、其末言葉を以する事ハ天下の人皆不信さるなり云云、是より金銭国用の事を論ス、
 曾而春嶽侯総裁職たりし時、三八自ラ幕府勘定局の帳面をしらへしに、幕の金の内つらハ唯銀座局斗りなりとて
 気の毒かり居候、御聞置可被成候、惣して金銀物産とふの事を論し候ニハ、三八へ^(名カ)置かハ他二人なかるへし、
 ……
- 10) 慶応2年12月4日 坂本龍馬「天下之人物」
 (『幕末維新の激動と福井』、福井県立歴史博物館特別展図録、2018年)
 一、当時天下之人物と云ハ、
 徳川家ニハ 大久保一翁 勝安房守
 越前にてハ 三岡八郎 長谷部勘右衛門(長谷部甚平)
 肥後ニ 横井平次郎(横井平四郎=横井小楠)
 薩にて 小松帯刀 是ハ家老にて海軍惣大将なり、
 西郷吉之助 是ハ国内軍事ニ懸る事、国家之進退此人ニ預る、
 長州にて 桂小五郎 国家之進退を預る、当時木戸寛次郎(貫治)
^(移カ)高松普作 此人ハ軍事ニ預る、此人下之関に出小倉攻之惣大将、当時谷讚蔵(潜蔵)
- 11) 慶応4年3月10日 評定役人事につき藩主茂昭宛松平春嶽書簡
 (『松平春嶽未公刊書簡集』、伴五十嗣郎編、福井市立郷土歴史博物館、1991年)
 ……我など(春嶽)考にてハ^(附中本多)興之輔へ者方今不容易御時体柄にも候間、御政務筋を始万般御補佐役被仰付候方可

然、本多修理^(家老)・松平備後^(家老)国政総督振退勤……村^(村田巳三郎)巳・千^(千本弥三郎)本参謀是甚以不可然哉ニ存候、……興之輔何申ても
 いた年若、備後と申ても正直之体はかりにて才力乏少、左すれハ権ハ村・千之両手ニ落ち可申ハ必定と存候、
 局々之総督懐不平候義今より指見之申候、局々之総督村・千之声息を仰き候義必定ナリ、終に長^(長谷部甚平)谷・三^(三岡八郎)岡之
 両手ニ権を握り候通りと存候、……

12) 慶応4年6月 本多興之輔の越後出兵反対論

(本多修理『越前藩幕末維新公用日記』、谷口初意校訂、福井県郷土誌懇談会、1974年)

再小^(水野)刑部斗御前へ被召出、興之輔ノ佐幕ニテ御入り被成候事、又宰相様へ御相談申上ハセスト云ニ御入り被成、
 何分趣意申上タケハ出来ルはずト説得シテ、委曲ノ上京へ指出、宰相様へ申上候事ト決シ候御断有之由、……
 (同九日)

△ハツ半頃興之輔着之由、而今日ハ府中旅館ニテ大評之由也、邸中よりハ一人も不行、終日彼方より一人も出テズ

13) 慶応4年7月10日 春嶽につき岩倉具視宛中根雪江弁解

(本多修理『越前藩幕末維新公用日記』、谷口初意校訂、福井県郷土誌懇談会、1974年)

(雪江)申上候ハ、書面も御座候通、国情やかましく申候へハ、即今ニ起り候事之様ニ相聞候得とも、素々一朝
 一夕之儀ニハ無之、……何ソト申朝廷幕府ノ為とて国家を不顧、度々之上京ハ天下ニ統兼々重畳之不服ニ相成
 居候、乍併〇〇^(老公)ニおゐてハ報国ノ志願御座候故、上京之評議毎ニいつもイサカイをスル様ニいたし、致出立候ハ
 定例位之事ニ御座候、別而昨冬之処ハ、不容易時勢と見込候故、士民トモニ上京ハさせぬと申位之勢ニ御座候得
 とも、宗家たる幕府政権を還し奉行、王政御復古に可相成折柄、 朝幕之召命難辞と申て罷出候事ニ御座候、右
 様之国情も無理ならぬ事御座候ハ、度々之上京ニハ御座候へとも、一度として是と申成功の見へ候廉ハ曾て無之、
 いつも仕方かない様成事にて帰国ニ及候手際ヲ見透し居り、深く案勞仕候事ニ付、昨冬来之上京ニも、早春已ニ
 大敗ヲ取り、其後迎も宗家より起り追々不容易御時態と相成候事ニ候へハ、兼々之憂勞一層相迫り、且此度出兵
 ニ付而も、在職而者徳川氏方より見候処ハ、朝廷ニ立甘シして宗家を倒候様ニも怨望可仕、又徳川氏方ならぬ
 方にてハ、何角ニ付宗家ノ為ニ致候歟と疑われ、両方トモニ覚へなき事ニ困窮仕候処、……何分にも辞職にて国
 元へ引取候得者、天下善悪之批判も不受ニテ、身狭キ事無之と申か国情ニ御座候、

その他主要史料と参考文献

「越前世譜 茂昭様御代」(松平文庫、福井県文書館保管、資料番号 A0143-01973~01992)

『越前松平家家譜 慶永1~5』(福井県文書館資料叢書、2010~2011年)

『橋本景岳全集 上・下』(景岳会、1939年)

『戊辰日記』(日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1973年)

『再夢紀事・丁卯日記』(日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1974年)

『奉答紀事-春嶽松平慶永実記-』(中根雪江、新編日本史籍協会叢書1、東京大学出版会、1980年)

『福井市史 資料編』(4 近世2・1988年、5 近世3・1990年、6 近世4下・1999年、7 近世五町方・2002年)

三岡丈夫『由利公正伝』(光融館、1916年)

山口宗之『橋本左内』(人物叢書、吉川弘文館、1962年改装判)

三上一夫『公武合体論の研究 改訂版-越前藩幕末維新史分析-』(思文閣出版、1990年)

高木不二『横井小楠と松平春嶽』(幕末維新の個性2、吉川弘文館、2005年)

高木不二『日本近世社会と明治維新』(有志舎、2009年)

松浦玲『横井小楠』(1976版の増補版、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2010年)

本川幹男「福井藩産物会所の設立と横井小楠」(『横井小楠と変革期思想研究』第6号、2011年)

本川幹男ほか『幕末の福井藩』(福井県郷土誌懇談会編、岩田書院、2020年)